

# 石碑の復元による中世アイヌ民族の生活史の研究

中村 和之 [函館工業高等専門学校／教授]  
山田 誠 [函館工業高等専門学校／助教授]  
川村 乃 [アネカムジャパン(株)／社長]  
泊 功 [函館工業高等専門学校／助教授]

## 背景・目的

中世のアイヌ民族の生活史の研究は、史料が極端に少ないため、アイヌ史の「空白」といわれる。唯一の同時代史料としては、15世紀初頭の「勅修奴児干永寧寺碑」と「重建永寧寺碑」がある。これらは、明朝がアムール川の下流域に立てた石碑であり、アイヌとの明朝との朝貢交易のありさまを記録した、決定的な史料である。これまでは拓本を利用した研究が進められてきたが、限界がある。これらの石碑は摩滅が激しく、肉眼ではほとんど分からない部分もある。そこで、3次元デジタイザにより形状測定を行い、5軸制御工作機械を利用して石碑を復元する。この作業を基礎に、石碑の文字の解読を進める。

## 内容・方法

今回の研究の大きな困難点は、石碑の原石の摩滅にある。石碑が摩滅すると、石碑研究の最も基本的な方法である、拓本による研究が難しくなる。残された方法としては、型取りしか考えられないのだが、この方法は雌型を取る際に、樹脂などを直接石碑につける必要があるため、原石を傷める可能性がある。

そこで、本研究では、非接触型3次元デジタイザを利用して石碑を測定し、3D-CADを利用してデータを編集することにより、石碑の彫刻内容の認識および石碑の再現加工のためのデータ作成を試みた。今回は予備作業として、戸井の板碑に関して3次元形状測定を行い、その3次元データからの彫刻内容確認と板碑形状復元を行った。つぎに、ウラジオストーク市の、沿海地方国立アルセーニエフ博物館に収蔵されている二つの石碑を計測した。石碑の文字の判読には、19世紀末から20世紀前半に採拓された拓本を画像処理した画像を併用して、より精密な判読に努めた。

## 結果・成果

明朝の第三代皇帝・永楽帝(在位:1402年～24年)は、自分が重用した宦官を各地に派遣した。南海遠征の鄭和が最も有名であるが、アムール川下流域に派遣されたイシハもそのひとりである。イシハの遠征は、鄭和のそれに比べると規模は小さく、あまり知られてもいない。しかし、北東アジア史に与えた影響は、看過できないものがある。

イシハは、ティルにヌルガン都司という役所を新設し、これに併設して永寧寺と石碑を立てた。永楽11年(1413)の「勅修奴

児干永寧寺碑記」がそれである。後に、先住民の手によって永寧寺が焼かれると、イシハは寺を再建し、また石碑を立てた。これが、宣徳8年(1433)の「重建永寧寺碑記」である。今回の研究計画では、「勅修奴児干永寧寺碑」と「重建永寧寺碑」の未解読文字、全体の約10%の文字をどこまで解読できるかが、重要な鍵を握る。例えば、「重建永寧寺碑」には、永寧寺の焼失について、

(宣徳)七年、上は太監の亦失哈<sup>おかみ たいかん</sup>と同都指揮<sup>イ シ ハ</sup>の康政<sup>こうせい</sup>に命じて、官軍二千と巨艦五十を率いて再び至らせた。民は皆故<sup>いぜん</sup>の如<sup>まま</sup>であったが、独り永寧寺が破毀<sup>はかい</sup>され、基址<sup>きし</sup>が存<sup>のこ</sup>っていた。之<sup>じ</sup>を究審<sup>きゅうめい</sup>したところ、其<sup>その</sup>の□人吉列迷<sup>ギ レ ミ</sup>で寺<sup>てら</sup>を毀<sup>こわ</sup>した者は、皆<sup>おそ</sup>怖<sup>おの</sup>れ懼<sup>おの</sup>いて戦慄<sup>ふるえ</sup>り、之<sup>その</sup>を憂<sup>おそ</sup>れ戮<sup>ころ</sup>されると以<sup>おも</sup>った。

とある。碑文の三行目にある「其の□人吉列迷で寺を毀した者…」の欠字の部分は、いくつかの拓本、3次元デジタイザによる文字の読み取りでも、判読には至っていない。筆者は前後関係や同時代の史料の用例から、ここを「野」と読んで「其の野人や吉列迷で寺を毀した者…」とすべきではないかと考えている。もしこの推定が正しければ、アムール川下流域に住んでいたツングース系の野人とニヅフ(ギリヤーク)の祖先といわれる吉列迷とが、永寧寺を破壊したことになる。これは、仏教を利用して支配を円滑に進めようとした明朝側の意図が、先住民には受け入れられなかったことを示すものといえる。この推定が正しければ、アイヌ民族も同じような行動を取っていた可能性があり、明朝とアイヌ民族との関係を考えるうえで、重要な問題である。

元朝とアイヌ民族との関係は、断続的な戦闘が続くという敵対的なものであったが、明朝とアイヌ民族との関係は、一転して平和なものであったといわれている。しかし、なぜそうなったのかについては、ほとんど分かっていない。今後の研究で、石碑の文字を確定することができれば、それをもとに明朝とアイヌ民族との関係を解明していく手がかりを得ることができる。15世紀は、津軽・十三湊の全盛期と重なる。「北の交易民」といわれるアイヌ民族の実態を解明する作業が、今後必要となる。

## 今後の展望

中世のアイヌ史を考えるうえで、大陸(沿海地方)やサハリンからの物資の流入と、アイヌ社会のポテンシャルの高まりをどのように捉えるのかという問題がある。ヌルガン永寧寺の二つの石碑は、現地に立っていた金石資料であり、後世の手が加わっていないという点からも、重要な資料である。すでにのべたように、文字の読み取りが一字違っていても、解釈は全く異なったものになってしまう。明朝とアイヌ民族との関係がどのようなものであったのか、この課題が解明されることによって、新しいアイヌ史が構築できる。

3次元デジタイザによる石碑の復元と文字の読み取りの作業は、まだ始まったばかりであり、今後も成果に結びつけるべく研究を継続していきたい。